

(実践報告)

2020 年度老年看護学実習の取り組みと展望

岡村絹代¹⁾ 名和祥子¹⁾ 樹神千尋¹⁾

I. はじめに

2020 年度の老年看護学実習は、中国武漢で発生した新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の感染拡大が中国国外へと広がり、わが国においても数回の緊急事態宣言の発令やそれに伴う対応に取り組んできた。大学教育においても同様に、講義・演習・実習を対象に、社会状況を鑑みながら、その運用方法を適宜変更・修正する対応が求められ、現在に至っている。

このように COVID-19 の影響を受け、老年看護学実習では、実習施設である介護老人保健施設における実習生の受け入れが困難であったことから、4 単位全ての実習を学内での老年看護学実習へと余儀なく変更した。そのような状況の中、筆者らが 2019 年度朝日大学保健医療学部看護学科紀要第 6 号で報告した老年看護学実習の課題をもとに、学内で対応した老年看護学実習の教育過程と課題について検討したので報告する。検討した内容は、今後も継続する可能性が否めない COVID-19 の影響に対応した老年看護学実習を建設的に推進するための資料とする。

II. 老年看護学実習の位置づけとねらい

1. 老年看護学実習の位置づけ

本学の老年看護学科目は、専門科目中の「看護の実践と展開」の中に位置づけられている。2 年次前学期に老年看護学概論（講義：1 単位、15 時間）、2 年次後学期に老年看護学援助論（講義：2 単位、30 時間）、3 年次前学期に老年看護学援助論（演習：1 単位、45 時間）、3 年次後学期から 4 年次前学期に老年看護学実習（4 単位、180 時間）の設定である。対象となる 3 年次生は、2019 年度のカリキュラム改正後の最後の学年である。

2. 老年看護学実習の目的と展開

老年看護学実習（4 単位）の実習目的は、「高齢者との関わりを通して、老年期を生きる人々の加齢および疾病・障害に伴う変化や生活および価値観を理解し、高齢者の“もてる力”に着眼しながら、End of Life（晩年期）を生きる高齢者の健康レベルならびに高齢者を取りまく家族や社会的環境について学修する。また、高齢者の QOL の維持・向上を目指した看護実践能力（知識・技能・態度）を養いながら、高齢者を全人的にとらえ、その人らしい“いきいき”とした生活や End of Life を目指し、高齢者が望む生活や状態を見据えた「目標志向型思考」の看護過程の展開を通じて、高齢者自身の“もてる力”を引き出す看護や自立・自律支援の方法、家族への看護、多職種・他職種との連携、多様な高齢者ケアの場における看護の役割と機能を学ぶ。」としている。本来の老年看護学実習では、介護老人保健施設で 1 名の高齢者を受け持ち、看護過程を展開する 3 週間の施設サービス分野の実習と、通所リハビリテーションにおいて、地域で生活する高齢者の生活と健康状態を把握し、看護の役割と機能を理解する居宅サービス分野での 1 週間の実習に分けて、4 週間連続で行っていた。しかし、全面的に老人保健施設での実習が不可能となったことで、実習目的から逸脱しないように、また、学内実習であっても限りなく臨地実習に近い学びにつながるように、実習目的と到達目標を再検討した。4 週間 4 単位の实習目標と到達目標（表 1）、および実習スケジュール（表 2）を別途示す。実習スケジュールは、実習目標を達成するために 1 週間を単位とした着眼点に基づいて、実習内容を計画した。

1) 朝日大学保健医療学部看護学科

表1 老年看護学実習目標と到達目標および評価

実習目標	到達目標	評価
目標1 高齢者の身体的・精神的・社会的な特徴を理解し、万全な体制で実習に臨むことができる	1) 事前課題の学修内容を理解し、熟考したレポート作成ができる。 2) レポートの体裁、期限を守り提出することができる。 3) 老年看護学実習に向けての自己の課題と目標が明確にできる。	レポートの内容
目標2 高齢者の潜在・顕在するニーズを多角的・科学的なアセスメントにより全人的に捉え、その人らしい“いきいき”とした生活やEnd of Lifeが過ごせるように、必要な看護の方向性が把握できる。	1) 対象者の加齢および疾病や障害の状況と現在行われている治療が理解できる。 2) 対象者の身体的、心理・精神的・社会的状況を理解するために必要な情報が収集できる。 3) 対象者のこれまでの生活を踏まえたうえで、現在の生活に関する情報が収集できる。 4) 日常生活動作の「している“活動”」と、「できる“活動”」が適切にアセスメントできる。 5) 日々の生活に影響を及ぼしている要因を明らかにすることができる。 6) 対象者の全体像を適切に捉え、その人らしいEnd of Lifeを過ごせるために必要な看護の方向性を明らかにすることができる。 7) 対象者の望む生活や状態を見据えた看護上の課題（ニーズ）の抽出と期待される結果を明らかにすることができる。	看護過程の内容
目標3 導き出したアセスメントの結果から、高齢者の「もてる力」を引き出し高齢者が望む生活や状態像を見据えた「目標志向型思考」の看護計画の立案、実践、評価、修正ができる。	1) その人らしく望ましいEnd of Lifeの実現を目指し、「もてる力」を引き出す「目標志向型思考」の具体的な看護計画が立案できる。 2) 対象者の意思を尊重し、安全・安楽に配慮しながら「もてる力」を活かした看護実践ができる。 3) 立案した看護計画を評価し、必要に応じて柔軟に修正できる。 4) カンファレンスや発表会において積極的に意見交換ができ、自己の看護実践・学びについて根拠を示しながら、分かりやすく他者に説明できる。	実習態度 看護過程の内容
目標4 地域で暮らす高齢者には、異なる文化的背景や生活史があることを理解し、様々な場における高齢者看護の役割と機能が理解できる。	1) 高齢者がこれまで生きてきた時代に目を向け、高齢者個々の生活や健康観、健康状態があることが理解できる。 2) グループ討議や発表を通じて、様々な地域で暮らす高齢者の生活と健康状態、看護との関連性が理解できる。 3) 他者の理解や関心が深まる資料の作成と発表ができる。 4) 地域包括ケアにおける多職種・他職種との連携と看護の役割について説明できる。	実習態度 レポートの内容
目標5 全実習過程を通して、看護専門職者を目指す者として主体的・積極的・適切に看護を迫及する態度で実習できる。	1) 看護学生としての態度・言葉遣い、身だしなみができる。 2) 実習目標達成に向けて主体的・積極的に行動できる。 3) 指導者や教員からの指導に対して主体的に学修し、次の援助や行動に活かすことができる。 4) グループワークや発表では、リーダーシップやメンバーシップを発揮しながら、主体的・積極的に取り組むことができる。	実習態度

表 2 4 単位 (4 週間) の老年看護学実習スケジュール

	1 週目	2 週目	3 週目	4 週目
着眼点	対象者の加齢・疾患の生活への影響を理解し、今後の老年看護実践に向けて考察する	その人の健康レベルや「生活の質」を考えながら、もてる力に着目し、その人らしさを活かせる看護の組み立てと実践①	その人の健康レベルや「生活の質」を考えながら、もてる力に着目し、その人らしさを活かせる看護の組み立てと実践②③	地域で暮らす高齢者の文化的背景や生活史が高齢者の生活や健康に与える影響を理解。様々な場での高齢者看護の役割と機能を考察
月曜日	<ul style="list-style-type: none"> ・実習オリエンテーション (4 週間の実習の概要, 1 週目の実習内容, 実習の留意点等) ・老年看護学演習関連のレポート返却 ・講義「シニア体験」 ・実習「老いるということ～加齢に伴う変化と高齢者の生活～」シニア体験実習と学びの言語化 	<ul style="list-style-type: none"> ・2 週目実習オリエンテーション ・講義(事例に基づく看護過程①) ・認知症に関する知識の確認 ・DVD「認知症高齢者の看護 (DVD; 眼で見る老年看護学第 2 版)」視聴との学びの言語化 ・個人ワーク (看護過程完成) ・看護過程の事例から、一部の看護計画 (フットケア) 実践に向けての実習準備 (個人学修) ・実習テーマ「高齢者の歩く力を支える看護～転倒予防に向けたフットケア～」 ・演習関連のレポート返却 ・実習テーマの「看護技術手順書」作成 (個人ワークとグループワーク) 	<ul style="list-style-type: none"> ・3 週目実習オリエンテーション ・講義(事例に基づく看護過程②) ・グループ毎に立案した看護計画の発表 ・看護計画実践 (ロールプレイ) に向けたシナリオ作成とシミュレーション, 実習準備 	<ul style="list-style-type: none"> ・4 週目実習オリエンテーション ・地域包括ケア推進事例学修「地域の高齢者を支える看護の仕事 (山本三樹雄氏)」 ・学びの言語化 ・意見交換、発表 ・地区踏査のための資料作成 (個人ワーク→グループワーク)
火曜日	<ul style="list-style-type: none"> ・講義 (KJ 法) ・「老いるということの実習体験から得た高齢者の生活と看護の役割の言語化 (KJ 法でのグループワーク)」 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習テーマに沿った準備 (グループワーク) ・看護計画実践 (ロールプレイ) に向けたシナリオ作成とシミュレーション, 実習準備 		<ul style="list-style-type: none"> ・地区踏査
水曜日	<ul style="list-style-type: none"> ・「老いるということの実習体験から得た高齢者の生活と看護の役割の言語化 (KJ 法を用いたグループワーク)」 		<ul style="list-style-type: none"> ・看護計画発表、ロールプレイ ・看護過程のまとめ ・グループワーク 	<ul style="list-style-type: none"> ・地区踏査結果のまとめ (グループワーク)
木曜日	<ul style="list-style-type: none"> AM: 「老いるということの実習体験から得た高齢者の生活と看護の役割の言語化 (KJ 法を用いたグループワーク)」 PM: 学修成果の発表 	<ul style="list-style-type: none"> AM: ・学修成果の発表 実習テーマ「高齢者の歩く力を支える看護～転倒予防に向けたフットケア～」 PM: 実習テーマ「高齢者の歩く力を支える看護～転倒予防体操」 ・転倒予防体操考案 (グループワーク) 	<ul style="list-style-type: none"> ・学修成果の発表 「グループ毎に立案した看護計画の発表」 ・リフレクション 	
金曜日	<ul style="list-style-type: none"> ・リフレクション (学びの言語化) 「老いるということ～シニア体験から得た老年看護学実践への考察～」 	<ul style="list-style-type: none"> AM: 実習テーマ「高齢者の歩く力を支える看護～転倒予防体操」 転倒予防体操考案 (グループワーク) PM: 転倒予防体操 発表, リフレクション 	<ul style="list-style-type: none"> ・4 週目の実習オリエンテーション ・地域包括ケア推進事例学修「介護老人保健施設におけるサービスの役割と地域の活動 (坪内貴志氏)」 ・第 2, 3 週の実習内容を踏まえた学びの言語化「その人らしい“いきいき”とした生活や End of Life を支えるために必要な看護に関する考察」 	<ul style="list-style-type: none"> AM: 地区踏査結果の発表, リフレクション PM: 全実習のまとめ, 学びの言語化 「生活歴を踏まえ、自立・自律支援目標とした、高齢者看護の役割と機能」 家族への看護、多職種・他職種との連携含む ・全記録用紙提出 ・面接

Ⅲ. 老年看護学実習の実践と評価

1. 老年看護学実習の具体的な内容

実習スケジュールに沿った実習目標と到達目標に対して、1週間単位の着眼点がずれないように、日々の実践と振り返り、修正を行いながら推進していった。

実習1週目は、〔実習目標2〕の「高齢者の潜在・顕在するニーズを多角的・科学的なアセスメントにより全人的に捉え、その人らしい“いきいき”とした生活やEnd of Lifeが過ごせるように、必要な看護の方向性が把握できる」という目標に対する具体的な展開方法として、対象者の加齢および身体的、心理・精神的・社会的状況を理解することを目指して、シニア体験実習を行った。この実習は、本来2年生次前学期に開講の「老年看護概論」でのレポート「老いるとは(1)」の発展演習として、3年生次前学期「老年看護学演習」の中で、「老いるとは(2)シニア体験からの学び」として学習計画していたものである。しかし、本年度の「老年看護学演習」もCOVID-19の対応としてオンライン講義となったため、学生の思考の中での「老いること」と、体験としての「老いること」が結びついていない。そのため、ペーパーペーシェントでの看護計画の内容は、学生自身の生活体験を基盤に安易で薄く、実行可能性が低いものとなっていた。そこで、本実習において「老いること」を当たり前の日常生活の中から実体験し、看護過程での看護計画によりリアリティに反映させ、実現可能な看護計画の作成を目指すこととした。シニア体験は、学生を3グループ編成し、さらに高齢者役、看護師役、観察者役の3人グループで編成した。COVID-19の対策として、密を回避できるように体験ルートを二分化し、さらにその中の体験順序が重ならないように複数のルートを設定し、シニア体験を行った(写真1)。ここでの学びは、役割ごとに言語化し、その後複数のグループを合併して学びを深め共有した。さらに、そのグループでKJ法を用いて「老いるということ～実習体験から得た高齢者の生活と看護の役割」をまとめ発表・意見交換を行い、1週目の実習のまとめとした(写真2)。

実習2・3週目は、その人の健康レベルや「生活の質」を考えながら、もてる力に着目し、その人らしさを活かせる看護の組み立てと実践①②を着眼点とし、ペーパーペーシェント事例の認知症高齢者の看護過程の展開を中心とした実習内容とした。この事例は、前学期の「老年看護学演習」の中で取り扱った事例であり、個別の学生ごとに紙面による看護過程の展開(看護計画立案まで)を行い、回答例の講義により修正・変更が行われているものである。前学期終了後に回収し、学生ごとの理解度を確認したが、加齢や認知症のアセスメントおよびそれらの状況が日常生活に影響することのアセスメントが不十分であった。そのため、この事例の高齢者を実在する高齢者として位置づけ、実習2週目は老年看護学の教員が立案した看護計画の一つの実践を、3週目は学生が立案した看護計画の一つの実践をロールプレイとして発表する内容とした。2週目の実習テーマは、「高齢者の歩く力を支える看護～転倒予防に向けたフットケア～」とし、講義、デモンストレーション、実習の運営は教員主体で実施した(写真3)。また、地域の高齢者に活用できる「転倒予防体操」も考案し、発表、リクレーション、フィードバックにより2週目のまとめとした(写真4)。3週目は、学生が主体に事例の中で着目した看護技術として「口腔ケア」「嚥下体操」「おいしさを実感できる食事の支援」「モーニングケア」などを取り上げていた(写真5)。

そして、ペーパーペーシェントの看護計画の作成と、発表に向けたシナリオ作りおよび準備を行った。発表までの学習内容は、アセスメントの補助となる「フットケアに関する講義」「DVD学修」「関連図書や事前課題を活用した個人ワーク・グループワーク」「シミュレーション」などを行い、根拠ある看護実践になるように、教員・学生ともに納得するまで、繰り返し打ち合わせを行った。発表風景は録画しその結果をフィードバック・リフレクションしながら、看護計画の完成を目指した。

4週目は、地域で暮らす高齢者の文化的背景や生活史が高齢者の生活や健康に与える影響を理解し、様々な場での高齢者看護の役割を明確にするために、地域包括ケアの推進事例の講義と地区踏査を行った。まず、講義では、地域包括支援センターの保健師の活動を事例に、地域で生活する高齢者の生活支援の視点と多職種連携による地域包括ケアの実際を学び、学びを言語化した。次に、地域で暮らす高齢者の文化的背景や高齢者の生活を知るために、地区踏査を計画した。学生4～5人一組のグループ編成により、本学が岐阜県所在の大

学であることから、瑞穂市、岐阜市、大垣市の3市を対象に、その地域の歴史や文化的背景、高齢者を取り巻く保健・医療・福祉などの整備状況と生活環境などについて、コミュニティー・アズ・パートナーモデルを用いて地域の情報収集とアセスメント、資料作りを行い、それぞれの対象地域に出向いて、地域の特徴と高齢者の生活を体感してきた(写真6)。その結果を、マインドマップとして整理・発表、意見交換し学びを共有した(図1)



写真1 シニア体験中の学生の様子



写真4 2週目の転倒予防体操の発表風景



写真2 「老いるということ～実習体験から得た高齢者の生活と看護の役割～」をテーマとしたグループワーク風景



写真5 看護過程の展開
(おいしさを実感できる食事の支援)



写真3 2週目の看護過程の展開
(歩く力を支えるフットケア)



写真6 地区踏査の様子
(瑞穂市内 別府観音にて)

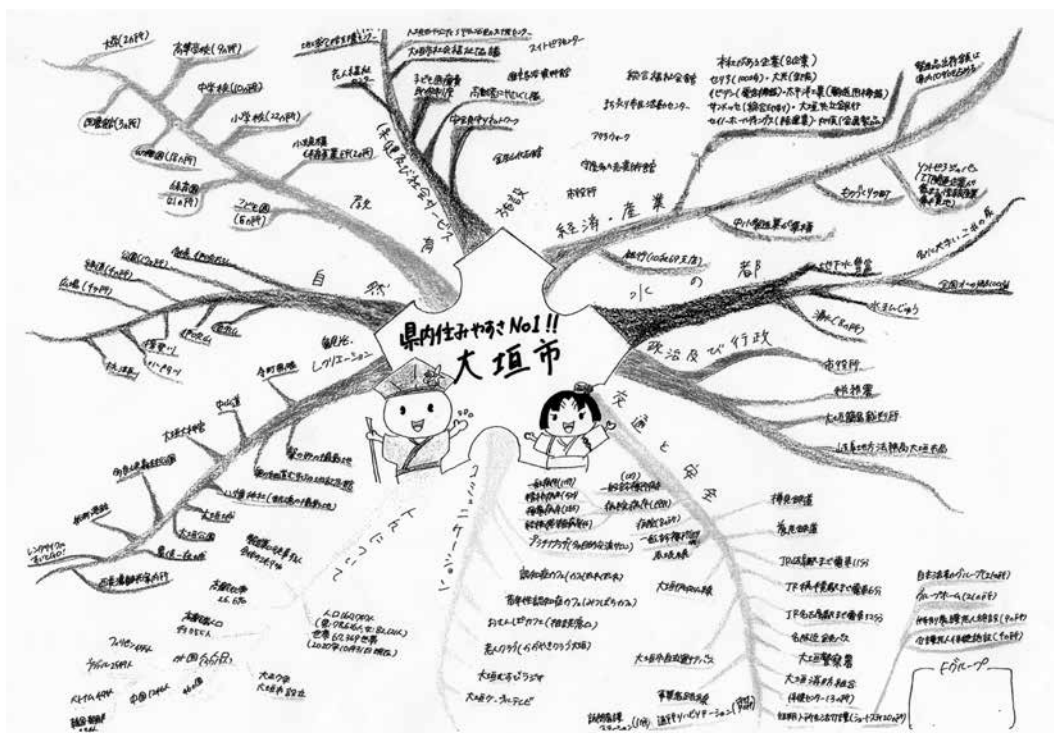


図1 地区踏査結果 (学生が作成したマインドマップ)

2. 実習評価

老年看護学実習は、2020年12月末現在で3グループ(82名)が終了し、2021年5月に残り1グループの実習を控えている。そのため、5月実習の資料として、また、3グループの学生による実習評価を得るため、当該学生たちに老年看護学実習内容に関する簡単な無記名のアンケート調査を実施した。アンケートの内容は、Googleを用いて1週間単位の学習内容の満足度を3段階(3;満足, 2;だいたい満足, 1;不満足)で質問した(図2)。回答を提出したことで同意とした。回収率は60.7%であった。どの項目においても満足と答えた学生が最も多く、満足の度合いが高かった実習内容は、「フットケア(78%)」、「シニア体験(74%)」であった。「満足」と「だいたい満足」の割合を合算しても、90%以上であり、実習に対する満足感が高かったといえる。自由記述の欄には、「実習には行けなかったが、2週間ごとの到達目標が示され、それに対する学びや理解が深まった」ことや「グループ学習は大変だったが、力になった」などのポジティブな意見もあった。一方、「看護過程については複数事例を取り組みたかった」等、より学習しようとする姿勢も見られた。

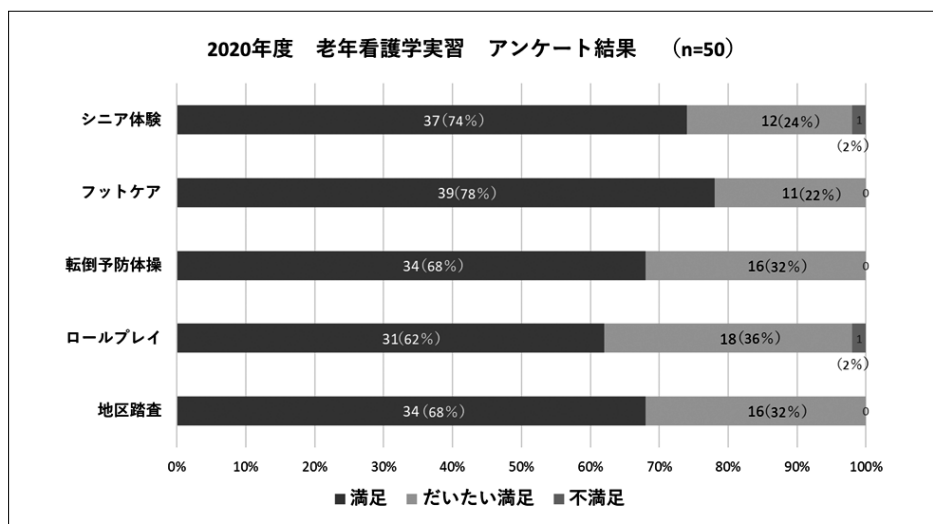


図2 授業評価アンケート結果

IV. 2020 年度老年看護学実習を終えての課題と次年度への展望

本稿では、全面的に学内実習となった 2020 年度の老年看護学実習を振り返り、その教育課程の課題を検討した。その結果、4 週間連続の長い実習期間であったが、学生は実習内容を理解しようと事前課題や日々の学習内容に真摯に取り組みながら、高齢者の日常生活や特徴および必要な看護について理解できた。またその過程でのグループダイナミクスも引き出すことができた。一方、そこに看護の対象が不在の実習は、現実的な看護場面として実感できにくく、学内実習での限界でもある。

野口 (1996) が、「看護基礎教育では、学生が広く人間生活を見つめる目を養い、看護の役割・機能をはっきりと自覚できることに焦点を当てるよう示唆する必要がある」と述べているように、学内実習であっても明確な実習目的と実習目標に基づき、その効果を最大限に引き出せる教授方法を用いて、学生が老年看護学の特徴を理解できるように教員も考えサポートしていくことが重要である。その点では、全グループではなかったが、実習施設である瑞穂市社会福祉協議会や瑞穂市地域包括支援センターの協力を得ながら、オンラインでの「認知症カフェ」や「岐阜市ボランティア・市民活動フォーラム」にも参加できた。また、オンラインにより、地域で活動する健康な高齢者の語りも聴くことができた。感染予防対策による規制により、できないことが多い実習でもあったが、その中でもできることに着目し積極的にチャレンジしていくことで、従来の臨地実習では得られなかった知見や新たな教育方法を得ることができた。また、2019 年度老年看護学実習の課題では、老年看護学の「講義」-「演習」-「実習」を一連の学習過程とすることの重要性を上げていたが、本年度は、「演習」と「実習」が混在する等、より柔軟な対応が求められた。

現時点での COVID-19 の感染状況を鑑みると、今後も高齢者施設での実習の受け入れは難しいことが予測できる。「ピンチをチャンスに」転換していきながら、どのような状況においても、老年看護学教育を継続していくことは、人間の生活や生活する力を見つめる看護職者の育成に寄与し、その視野を広げ豊かにすることを信じながら、推進していきたい。

謝 辞

想定外の実習にも関わらず、老年看護学教育に関して親身になってご協力いただいた瑞穂市社会福祉協議会様、瑞穂市地域包括支援センター様に、心より感謝申し上げます。

また、写真を提供していただいた学生の皆様、ありがとうございました。なお、写真の掲載については、学生の許可を得ております。

文 献

朝日大学ホームページ. COVID-19 感染症への本学の対応について (まとめ).

<https://www.asahi-u.ac.jp/>, 2021-01-11.

岐阜県公式ホームページ. 岐阜県新型コロナウイルス感染症に関する情報. <https://www.pref.gifu.lg.jp/>, 2021-01-11.

野口美和子 (1996). 看護教育における老人看護学, 日本看護教育学会誌, 6 (1), 1-9.